

製糸場と共に歩んだまちの魅力を掘り起こす ～富岡の歴史と生活文化に注目して～

日本大学商学部 木下征彦ゼミ

1 研究の実施状況

- (1) 研究期間 2020年6月30日(火)～2021年1月31日(日)
- (2) 実施場所 群馬県富岡市
- (3) 参加人数 4名(高瀬理帆・西田愛・長谷川夕夏・古家凌成)
- (4) 研究内容

本研究では、富岡市の富岡製糸場周辺を中心市街地地域における歴史や生活文化を調査し、新たな地域資源の発掘と観光まちづくりに向けた提案を行うことを目的とする。

研究を進めるにあたり、文献調査と現地でのインタビュー調査を行った。文献調査では、主に富岡のまちや製糸場の歴史に関する情報を収集・整理した。しかし、肝心な地域の生活文化に触れた情報は、文献から得ることができなかった。そのため、現地調査では富岡の商店街にて地域住民に対するインタビュー調査を実施し、「昭和期の富岡のまちの様子」について話を聞いた。

インタビュー調査では、まちの様子に加えて地域住民のまちでの思い出エピソードなど、文献では知り得ない情報を収集することができ、昭和期の富岡のまちが賑わっていた様子を推測することができた。また、まちの人に「富岡の良さ」について質問したところ、多くの住民が「人がおせっかいなところ」を挙げていたことが報告者たちにとって極めて印象的であった。

そこで、富岡のまちにおける「おせっかい」の位置づけを調査したところ、住民は「おせっかい」という言葉を「人があたたかいこと」として前向きに認識しており、富岡には「おせっかい」という生活文化が存在していることがわかった。

報告者たちは、このおせっかいを「人のためを思って行動をし、受ける側は期待していた以上のことをしてもらえること」と定義し、「おせっかいがどのようにして富岡の地域社会に定着したのか」について、本研究の本題となる「富岡の商店街の歴史と生活文化」との関係に注目して分析を行った。

分析の結果、富岡の商店街の特徴として「優れたコミュニケーション技術」および「 $+a$ (プラスアルファ)のサービス提供」という2つの要素を見出した。これらの要素は、「人のためを思っての行動」や「期待以上のことを受けられること」といった点において、おせっかいの構成要素になると考えられる。以上のことから、報告者たちは「おせっかい」を歴史や生活文化によって裏付けられる富岡ならではの地域資源として発掘した。

本研究では富岡の観光まちづくりの振興に向けて、新たな地域資源として発掘した「おせっかい」を観光客や地域住民に発信することを提案する。また、そのための手段として本研究の成果を集約した内容を掲載したパンフレットのコンセプトを提示する。

これが実現できれば、観光客に対しては製糸場だけでなく富岡の新たな魅力を発見する機会を提供することとなり、そうした観光客からの注目や評価は地域住民にとっても「日常」の中に地域の価値や魅力を発見するきっかけとなる。結果として、このような観光面と地域面における好循環が生じることで、本研究の目的である富岡市の観光まちづくりに役立てることが期待できる。

しかしながら、本年度の研究では、コロナ禍によって予定よりもフィールドワーク等の活動に遅れが生じたことから、成果物としてのパンフレットを作成する段階まで至ることができなかった。成果物の作成はさらに掘り下げた研究と共に、来年度以降の課題としたい。

2 研究の成果

【1 研究の目的】

本研究では、富岡製糸場周辺を中心市街地地域における歴史や生活文化を調査し、よそ者・若者視点から新たな地域資源を発掘して、富岡市の観光まちづくりに役立てる提案を行うことを目的とする。

ここで扱う〈地域資源〉はヒト、モノ、カネ、情報、組織など、地域づくりやまちづくりに資する有形・無形様々な資源である。また、〈観光まちづくり〉は「地域が主体となって、自然、文化、歴史、産業、人材など、地域のあらゆる資源を活かすことによって、交流を進行し、活力あふれるまちを実現するための活動」と定義されており（観光まちづくり研究会、2000）、観光を切り口としたまちづくりの理念・方策・実践を指す概念である。観光まちづくりの理念にもとづく方策を世界遺産・富岡製糸場を擁する富岡で実践することで、観光客に対する「新たな地域資源の提示」という意義に加えて、住民が地域の魅力を再認識・共有することによる「地域への愛着の形成」に寄与するなど、観光と地域の両面において好循環を生むことが期待できる。

【2 研究方法と調査内容】

① 研究方法

研究を進めるにあたっては、当初の計画に従って富岡製糸場周辺を中心市街地地域（以下、「富岡のまち」とする）における歴史や生活文化の調査を行った。そのため、明治期から昭和期にかけて製糸場と共に歩んだ富岡のまちの成り立ちやその賑わいについて、報告者たちと同じ「若者」という視点から捉えるべく、まずは製糸場で働いていた工女に注目し、関係資料の収集・整理を行った。

コロナ禍という状況もあり、現地調査に先立ちまずは富岡市および製糸場に関する文献調査に取り組んだ。富岡製糸場に関する文献は多数あるものの、富岡市が編纂した市史などを除くと富岡のまちやその商店街に関する研究は驚くほど少なく、今回入手できたものは井上（1977）や富岡地域商業近代化委員会（1986）、中山（2013）などわずかであった。また、富岡製糸場総合研究センター所長へのインタビューからも（2020年10月30日実施調査）、明治期から昭和期の富岡のまちの賑わいや昭和期の工女に関する体系的な資料はほぼ存在しないことがわかり、工女という視点から富岡のまちの生活文化や賑わいにアプローチする研究方法は修正を余儀なくされた。

そこで、文献調査では主に富岡のまちや製糸場における歴史など、まちの成り立ちや富岡製糸場の基本事項についての事実関係の整理を行い、生活文化やまちの賑わいについては、現地でのインタビューを中心に調査を行うこととした。

② 文献調査の調査内容（富岡のまちと富岡製糸場の関わりについて）

富岡のまちと富岡製糸場の関わりという視点から文献資料を検討した結果、「製糸業」とそれを支えた「工女」の存在は富岡のまちが商業地として栄えるために欠かすことのできない要素であったことがわかった。

まちの成り立ちと養蚕・製糸業

富岡のまちの歴史は江戸時代に遡り、幕府代官の中野七蔵を中心としたまちづくりによって、1617年に「富岡町」と名づけられたことにはじまる。江戸期の富岡町では、九斎市が固定的に開かれ、そうした市では地域の特産品が売買された。富岡を含む西毛地区では古くから養蚕が行われていたため、富岡の周辺地域においても自然と養蚕関係の産物が多くなった。そのため九斎市でも「生糸・絹」の取り扱い是最も多かった（富岡市、2012）。こうした歴史的な背景の下、現在の富岡市の一帯地域で養蚕・製糸業が定着しており、このことは後にこの地に富岡製糸場が建設される要因となった。

富岡製糸場の操業と工女

1872年に富岡製糸場が操業開始するとともに全国から工女が集められたが、製糸場開業当初の官営期は慢性的な工女不足であった。1872年10月には必要人数462人に対し、実際には404人しか集まらず、工女数が目標に達しないまま操業を開始した（富岡市、2012）。工女の就業時間は1日8時間と規定され、毎週日曜休みであった。また、生活面においては、大半の工女が場内の宿舎で暮らしていたことから、その安全を守るため「工女寄宿所規則」という厳しい規則のもと、秩序のある生活を送っていた（富岡市、2020）。しかし休暇には、化粧や買い物、芝居鑑賞といったようなある程度の自由が許されており（和田、2014）、官営期の富岡製糸場は「超ホワイト企業」であったとされている（遊子谷、2014）。

昭和期の「工女」とまちの賑わい

その後の昭和期においても、片倉工業富岡工場として操業していた製糸場では、会社の社会的責任を「従業



員を産業人、社会人、女性の場合は家庭人まで成長させること」とし、十分な社内教育が行われていた。なかでも女性である工女に対しては花嫁修行を支援するなど手厚く待遇されており、企業が従業員を大切な存在として扱っていたことがわかった（片倉工業株式会社人事部長助友康郎編、1988）。また、製糸場より北東部のエリアには工女のために映画館等の娯楽施設が建設され、そのような施設を中心にまちには賑わいが形成された（富岡製糸場誌編さん委員会、1977）。これらのことから、製糸場で働く若い工女たちは製糸業を担う労働者であったと同時に、飲食店や衣料品店、映画館やダンスホールなどを利用して富岡のまちに賑わいをもたらす消費者でもあり、まちの発展において重要な存在であったことがわかった。

富岡のまちと「工女」に関する文献

工女に関する文献資料については、和田（2014）や安立（2015）などから、官営期における富岡製糸場内での工女の労働・生活に関する情報を収集することができた一方で、昭和期の工女に関する資料は乏しく、富岡製糸場誌編さん委員会（1977）のほかには、前掲書（片倉工業株式会社人事部長助友康郎編、1988）や岡野（2018）など、わずかな文献しか収集できなかった。一方、世界遺産としての富岡製糸場については、森谷（2006）、遊子谷（2014）、日本大学商学部木下征彦研究室編（2018）、高橋（2018）などから、世界遺産登録をめぐる動きや地域住民・観光客の意識等を把握することができた。

富岡のまちの現在

こうした文献から、富岡のまちが製糸場と共に歩み、発展してきたことを改めて確認することができた。しかしながら、1987年の製糸場の操業停止によって、まちなかから工女や養蚕関係の商工業者の姿は消え、今では当時の賑わいを知る人々も少なくなりつつある。また、モータリゼーションの進展による郊外の大規模店舗の出店などによって、富岡のまちの賑わいは少しずつ減退し（富岡地域商業近代化委員会、1986）、現在では商店街にもシャッターが目立つようになっている。こうした状況の中で、世界遺産・富岡製糸場という有力な地域資源をもつ富岡において、観光まちづくりは地域の賑わいを生み出す方法として期待されている。

③ インタビュー調査の調査内容（昭和期の富岡のまちとその賑わいについて）

昭和期の商店街の賑わい

「昭和期の富岡のまち」について情報収集をするために、報告者たちは現地を訪問してインタビュー調査を重ねた。地域住民へのインタビュー調査から知ることができた昭和期の富岡のまちの姿は、現在とはまったく異なるものだった。商店街の通りが「歩行者天国のように賑わっていた」ことや「外の地域に買い物に行く必要が無いほど多種多様な店舗が揃っていた」という話などは（2020年11月26日実施調査）、昭和期の富岡のまちや商店街の賑わいを示すものであり、いかに「商業が盛んであった」のかを裏付ける証言といえる。

夜のまちの賑わい

また、昭和期の夜の賑わいやまちの印象・思い出についても「新宿の歌舞伎町のような飲み屋街の印象を持った」ことや、「飲み屋の客引きのお兄さんとキャッチボールをしてよく遊んでもらった」ことなど、さまざまな個人的なエピソードを聞くこともできた（2020年11月26日実施調査）。こうした数々のエピソードを採取することができ、報告者たちは「夜間も飲食店を中心にまちが賑わった」昭和期の富岡のまちの様子を具体的に想像することができた。また、スナックやクラブなどのいわゆる「飲み屋」が多いというまちの特徴は現在の商店街においても見受けられ（写真1・2）、インタビューでは「旦那が毎晩のようにまちなかの飲食店へ飲みに行っている」という話を聞くことができた。

フィールドワークの経験から感じた富岡

このように現地調査では多くの地域住民から協力を得て、昭和期の富岡のまちについての情報を収集することができた。また、調査以外の活動でもたくさんの支援を受けたが、このことは報告者たちにとって大変印象に残った。特に、11月の現地調査では突然訪



写真1・2：路地にあるスナックとクラブ
（2020年10月30日17:27報告者撮影）

間をしてインタビューの依頼をする、いわゆる「アポなし」のインタビュー調査を行った。地域で協力してくれた方は快くインタビューへの回答や知り合いを紹介してくれ、リレー形式でスムーズにインタビュー調査を実施することができた。なかには、「〇〇さんに電話しておいたからすぐ行ってみて!」とあらかじめ知り合いにインタビューの交渉をしてくれたケースもあり、至れり尽くせりのもてなしに報告者たちはとても感動した。このような経験を通して、報告者たちは富岡のまちが家族のようなゲマインシャフト的なつながりの強さを持っていることを実感した。また、他の地域では体験したことのないような特別な思い出を富岡で作ることができた。

【3 インタビュー調査からわかったこと】 内と外の視点から捉える富岡の「人の良さ」

富岡でのインタビュー調査では、昭和期の富岡のまちの様子がわかっただけでなく、地域住民との生の会話を通して、富岡の人のあたたかさを肌で感じた。報告者たちにとっては地元以外の地域で上述のような親切を受ける体験はとても魅力的に思えた。

そこで、本研究では、報告者たちが「よそ者」という立場から気づくことのできた富岡の「人」という魅力に注目することとした。人に注目してより掘り下げた調査を進めるにあたり、まず富岡の「人の良さ」について地域住民を対象にインタビューを行った。図1は、インタビューにて調査した<地域住民が富岡の「人の良さ」に対して抱くイメージ>と観光客に対するアンケート調査（日本大学木下征彦研究室編、2018）の結果を中心とした<よそ者が富岡の「人の良さ」に対して抱くイメージ>をまとめたものである。なかでも、まちの人が持つイメージとして「おせっかいであること」という意見が6人中4人と多く挙げられた（2020年11月26日実施調査）。

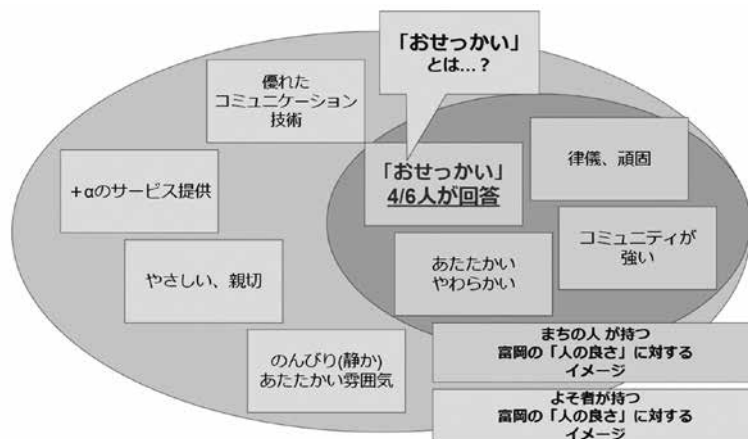


図1：富岡の「人の良さ」に対するイメージ

出典：報告者作成

※2020年11月26日のインタビュー調査の成果からまちの人が持つイメージを、日本大学商学部木下征彦研究室編（2018）の自由記述をもとによそ者が持つイメージを抽出して作成

地域社会における「おせっかい」

そこで、富岡における「おせっかい」についてより掘り下げて調査をしたところ、2つの事実を再発見した。1つは、かつて富岡の商店街を中心に実施されていた「おせっ会」という取り組みである（写真3）。この取り組みは、かつて製糸場の世界遺産登録を見据え、地域住民によって企画された商店街のおもてなし企画である。もう1つは、富岡商工会議所が2013年に策定した「おもてなし五カ条」における「おせっかいが大好きなまち」という記述である（富岡商工会議所・とみおか観光まちづくり協議会、2013）（図2）。このことから、「おせっかい」という言葉は富岡の地域社会においてもある種の共通の感覚やキャッチコピーとして使用・共有されていることがわかった。



インタビュー調査によれば、地域住民はおせっかいを富岡の良さとして捉えており（2020年11月26日実施調査）、一般的にはしばしばネガティブな印象や意味合いを含む「おせっかい」という言葉が、富岡ではポジティブな意味合いとして用いられている。また、地域社会においても「おせっかい」をキーワードに据えた取り組みやスローガンが存在することから、より広い範囲で人々に共有されていることがわかった。そこで、報告者たちはこの富岡の人の良さである「おせっかい」を地域の生活文化に根差すものとして捉え、本研究の目的である「新たな地域資源」として「おせっかい」を発掘しようと考えた。



写真3：商店街で発見した「おせっ会」の看板
(2020年11月26日15:31報告者撮影)



図2：富岡市商工会議所「おもてなし五カ条」
出典：富岡商工会議所ホームページ（2017）

【4 富岡における「おせっかい」の形成過程の分析】

「おせっかい」がどのようにして富岡の地域社会に定着したのか

報告者たちはインタビュー調査や自らの経験を通して、富岡の「おせっかい」を「人のためを思って行動をし、受ける側は期待していた以上のことをしてもらえること」と定義した。その上で、報告者たちは『「おせっかい」がどのようにして富岡の地域社会に定着したのか』という問いを立て、本研究の主題である「富岡の『商店街』の歴史や生活文化」との関わりから分析し、資料やデータで裏付け・説明することとした。

分析にあたっては、富岡の商店街を「昭和期」と「平成・令和期」の時期に分け、これまでの文献調査や現地調査を土台として商店街の来街者などに関するデータから各時期の商店街のあり様やその特徴を見出した。そして、その商いで磨き上げられ、発達してきた商業技術やホスピタリティから、富岡の地域社会における文化としての「おせっかい」が生まれたことを検証した。

① 昭和期の商店街に関する分析

西上州の中心地としての富岡の賑わい

文献調査とインタビュー調査より、昭和期の商店街は主に西上州の商業の中心地として栄え、他所からもこんなに多く商や材木商など商工業者が来訪していたことがわかった。そのような商工業者たちの来訪目的には、物品の取引以外にも「飲食店（主に飲み屋）の利用」があったという（2020年11月26日実施調査）。昭和前期の富岡のまちには芸者が多くおり、女郎屋（遊郭）が存在した。1935（昭和10）年以降には「萬世閣・三好テイ・竹屋」という女郎屋があり、製糸場職員及び、養蚕農家、商工業者が利用していた。しかし、これらは1958（昭和33）年の売春防止法の施行により閉店を余儀なくされ、1955（昭和30）年中頃よりスナックバーやコンパニオンが出現した（中山、2013）。インタビュー調査からもこのような富岡の花街文化があったという事実が裏付けられている。以上のことから、昭和期の富岡の商店街は「夜間まで明かりが灯り、飲食店を中心に賑わっていた」ことがわかった。

よそ者も訪れる繁華街

また、1985（昭和60）年に実施された調査による「来訪者の交通手段の割合」を示したデータ（図3）からも、遠距離から富岡の商店街への来訪者と近隣からの来訪者がほぼ等しく、他所からの来街比率が比較的高いことが分かる（富岡地域商業

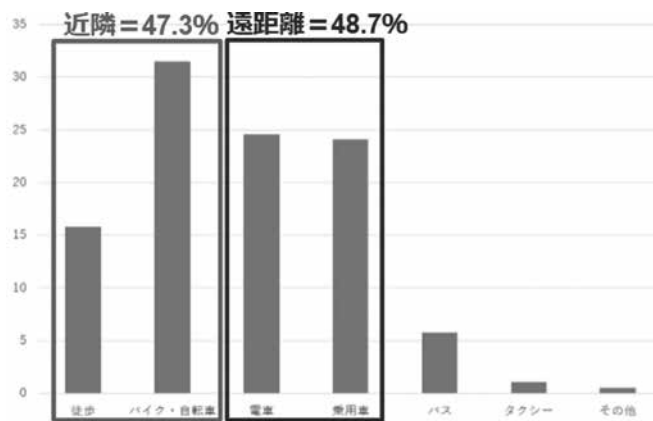


図3：昭和後期における来訪者の交通手段
出典：富岡地域商業近代化委員会（1986年）をもとに作成

近代化委員会、1986)。

さらに、市外からの来訪者には全体と比較して男性の割合が高く、年齢構成は18～30歳未満とサラリーマンの構成が高い(富岡地域商業近代化委員会、1986)。また、地点別の特徴として駅前商店街や銀座商店街は、市外からの来訪者の割合がそれぞれ46.9%、42.4%と全体平均に比べて高くなっている(富岡地域商業近代化委員会、1986)。なかでも、昭和後期の銀座商店街は上述したスナックバーなどの飲食店が多くあったエリアに該当し(中山、2013)、これらのデータをまとめると「市外居住のサラリーマンが富岡のまちを訪れ、スナックバーなどの飲食店をよく利用していた」ことが明らかであり、昭和期の富岡のまちは昼間・夜間ともに繁華街として多くの人を集めていたといえる。

「優れたコミュニケーション技術」の発達

以上のことから、昭和期の富岡の商店街は「飲食店を中心に人で賑わっていたこと」や「来訪者としてよそ者の比率が比較的高かったこと」などが特徴として挙げられる。昭和期の富岡の商店街は、西上州の商業の中心地として①比較的に広い商圈を持っており(富岡地域商業近代化委員会、1986)、市内外さまざまな人が集い、交流する場であった。また、②夜間においても飲食店を中心にまちが賑わったことがわかった(2020年11月26日実施調査)。市内外問わず人が集うという商業の中心地としての性格に加えて、昭和期の花街文化にみられる繁華街の発達によって、店員と客または客同士が交流をしながら飲食をするコミュニケーションの場が富岡のまちにたくさん設けられた。こうした商業・文化的特徴により、様々な人びととの交流が盛んに行われていた昭和期の富岡の商店街では「優れたコミュニケーション技術」が磨き上げられ、発達したと考えられる。

② 平成・令和期の商店街に関する分析

「世界遺産効果」の経験

平成後期には2014年の富岡製糸場の世界遺産登録をきっかけに、製糸場の見学者数も急増し、いわゆる「世界遺産効果」によってかつてないほど多くの観光客が訪れ、商店街も一時的にかつてのような賑わいを見せた。しかし、その翌年以降は見学者数が減少傾向となり、現在では当時のような賑わいはほとんど無くなってしまった(図4)。

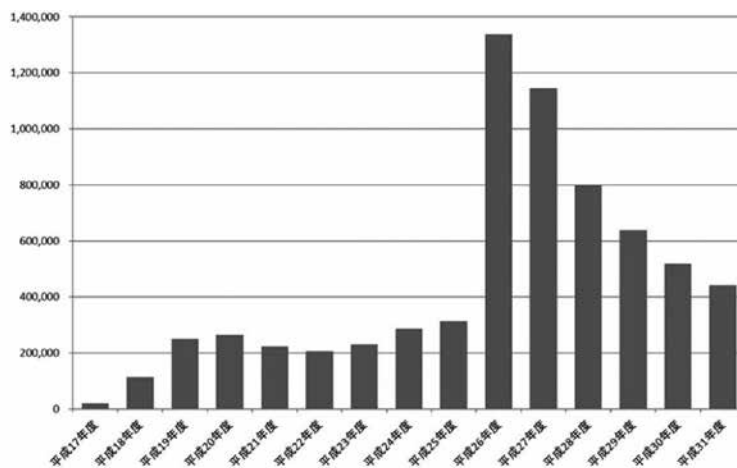


図4：富岡製糸場見学者数の推移
出典：しるくるとみおかホームページ(2020)をもとに作成

こうした現状を踏まえ、地域住民を対象としたインタビューでは「将来の富岡のまちがどうあってほしいか」について質問した。少し意外なことに、この質問に対する回答には「世界遺産登録当初の賑わいを再現したい」という意見よりも、「商売はそこそこだが、今はとても楽しい!」や「今は今、昔は昔と気持ちを切り替えて、無理をせずにありのままの富岡であってほしい」など、現状肯定的な回答が多く見受けられた(2020年11月26日実施調査)。古くから富岡の商店街で店舗を経営するある店主は「かつては人で賑わっていてなかなかお客さんの名前を覚えたりできなかったけど、今はお客さんの名前を覚えて、会話を楽しみながら接客できることが嬉しい」と、いわばゆとりをもってサービスを提供できる現状をプラスに捉え、喜びを感じていた(2020年11月26日実施調査)。



ゆとりが生み出した「+αのサービス提供」

これらのことから現在の商店街は、昭和期と比較すると訪問客数の減少やそれによる賑わいの低下が課題としてみられる一方で、訪問客ひとりひとりに対するゆとりあるサービスを提供できる余裕をもつようになったといえる。それは商店のホスピタリティの向上につながり、現在の商店街のサービスの質はかつてのそれよりも高いものが期待できるようになった。これを報告者たちは「+α（プラスアルファ）のサービス提供」として概念化した。この「+αのサービス提供」には、例えば図5の資料に記述されているような取り組みが挙げられる。資料を提供してくれた店主は、このようなホスピタリティあふれる取り組みによって「買い物という目的以外の価値を生み出すことが自分の役割である」と話していた（2020年11月26日実施調査）。

報告者たちが現地調査で実感した「富岡の人のあたたかさや親切」も、ひとりひとりに対するホスピタリティにあふれたサービスが期待できる現在のゆとりある商店街だからこそ体験することができたと思われる。このように、訪問客の最低限の購買目的やニーズに応答するだけでなく、加えて、思いがけない特別な体験を提供するといった付加価値の提供、すなわち「+αのサービス提供」が現在の富岡の商店街の強みであるといえる。



図5：「+αのサービス提供」の例
出典：店主提供

③ 分析結果

商店街の歴史からみる2つの要素

以上のさまざまな歴史的な資料・データの分析より、昭和期の商店街が磨き上げ、受け継がれてきた「優れたコミュニケーション技術」、平成・令和期の商店街ならではの条件を活かした「+αのサービス提供」という2つの要素を見出すことができた。そして、現在の商店街においては地域住民が「優れたコミュニケーション技術」を駆使して訪問客の気持ち（ニーズ）を汲み取り、実際に言動に移すことでホスピタリティあふれる「+αのサービス提供」を可能にしているといえる。このように、この2つの要素が相互に作用し合うことで、報告者たちが体験したように、商店の訪問客にとって思いがけない特別な体験を生み出している。

富岡のまちの歴史・文化から生まれた「おせっかい」

これを、本研究の【分析】の冒頭で述べた「人のために思って行動をし、受ける側は期待していた以上のことをしてもらえること」すなわち富岡の「おせっかい」との関係から紐解くと、図6ようになる。自ら駆け寄って「優れたコミュニケーション技術」を活かし、相手のニーズを汲み取ろうとする行動は「人のために思っての行動」であり、さらにニーズを超えた「+αのサービス提供」を行うことは「受ける側にとって期待以上のこと」となる。したがって、この2つの要素は「おせっかい」を構成する要素として成り立つ。また、本研究ではおせっかいは商店街における商業技術やホスピタリティから生じたものとしたが、現在の富岡のまちではおせっかいは店先のコミュニケーションに限らず「生活レベルにまで浸透」しているといえる。例えば、インタビューのなかで住民は「まちなかを散策していた観光客の浴衣が着崩れていたのを見かけて、居ても立っても居られ

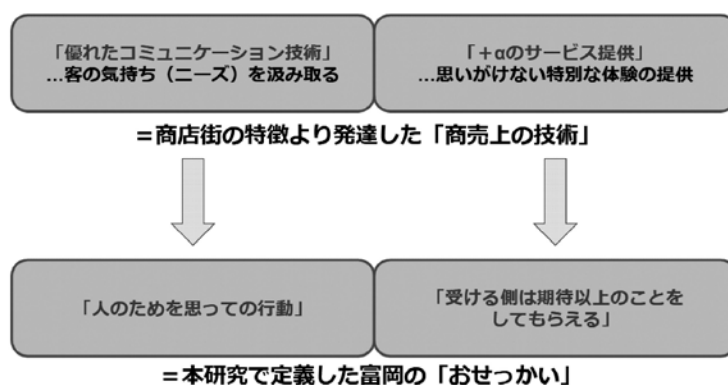


図6：分析結果
出典：報告者作成

ずに呼び止めて直してあげたのよ」と観光客とのエピソードを微笑みながら話していた。このように「おせっかい」はあらゆる場面においてみられ、まち全体に定着していると考えられる。

【5 結論】

本研究では、よそ者・若者視点から新たな地域資源を発掘するという目的に対して、富岡製糸場周辺の中心市街地地域における歴史や生活文化という視点から「おせっかい」を新たな地域資源として発掘した。おせっかいを地域資源として位置づけるために、まず文献調査を通じて歴史的な記述や各種データを検討の上、現地調査を通して「人」という魅力に気づき、富岡の歴史・生活文化という視点から分析をした(図7)。調査から富岡においておせっかいはポジティブな意味合いで用いられていることがわかり、分析ではおせっかいを富岡の商店街の特徴から裏付け・説明した。



図7：結論までの流れ
出典：報告者作成

「おせっかい」という地域資源は実際には目に見えるものでも触れるものでもない。しかし、報告者たちが富岡のまちを歩き、地域の人と会話した体験を振り返る中で感じた他の地域では体験したことのない特別な思い出は、富岡ならではの体験であった。それは【分析】において示したように、地域の人々にとっては当たり前のように根付いている「人のために思う行動」によるものであり、その意味で地域生活文化の1つである「おせっかい」は地域資源であるといえる。

富岡のまちの人々にとっての当たり前の日常は、よそからの訪問客、とりわけ報告者たちのように都会や現代的な人間関係の中で日常を送るよそ者にとっては、まさに「非日常」であり、新しい体験を提供してくれる。近年では「コト消費」や「体験型観光」などが注目され、対面販売を売りにするデパ地下や商店街の他にもさまざまな体験型観光の旅行商品など、「非日常体験」を作り出すコンテンツが登場している。しかし、富岡のまちでは日常の中に、そうした現代の都会人にとって「非日常体験」となる生活文化と、それを当たり前のように体現する「人」が存在する。これは今後の富岡の観光まちづくりを考える上で、重要な地域資源として位置づけることができると考えられる。

そこで、おせっかいという地域資源を活用して、富岡市の観光まちづくりに役立てる方法については、以下【提案】で述べる。

【6 提案】

富岡の新たな地域資源として発掘した「おせっかい」を観光客や地域住民に知ってもらうための手段として、パンフレットの作成を提案する。

パンフレットの作成に先立って「観光客からみた富岡の印象」に関する調査データを分析したところ、「製糸場以外に回れるスポットがない」という意見が多くあった(日本大学商学部木下征彦研究室編、2018)。そこで、本研究で提案するパンフレットでは、製糸場だけではなく「富岡のまちや人の生活文化」という新たな視点から魅力の発信をしたいと考えた。

本研究では、おせっかいについて「人のために思って行動をし、受ける側は期待していた以上のことをしてもらえること」としたが、これは本研究上の理念型的なイメージモデルに過ぎず、「富岡のおせっかいは〇〇

である」と定義したものではない。報告者たちは、おせっかいは各々の親切心から発生する主体的な行動であり、全く同じおせっかいは二度と体験することはできないと考えている。そのため、ここで提案するパンフレットはあくまでも一例として「おせっかい」を提示し、観光客の富岡での体験や楽しみの期待につながるようなものにしたいと考えている。

研究の都合上、パンフレットを作成する段階までには至らなかったが、本研究で明らかにした「富岡の『おせっかい』が発生した経緯」や「報告者たちの経験をもとにまちに広がる『おせっかい』文化の紹介」など本研究を集約した内容を掲載することを検討している。成果物の作成はさらに掘り下げた研究と共に、来年度以降の課題としたい。

【7 展望】

このパンフレットにより観光客は、まちの「人」へ興味・関心を持ち、実際に地域でのコミュニケーションなどのリアルな体験を通して富岡の新たな魅力の発見につながることを期待できる。また、報告者たちのような主に都市型の生活を日常としている人々に対しては、地域の人々とのコミュニケーションは極めて特別なものを感じられる。そうしたまちでの「非日常」体験が富岡ではポジティブな意味合いを持つ「おせっかい」という言葉と紐づけられることで、「富岡＝おせっかい」というイメージの定着およびまちでのさまざまな体験がまち全体のイメージアップとなる。

こうした外からの評価は、地域の人々にとっても、当たり前の日常であったおせっかいを都会や他の地域にはない富岡ならではの「魅力」として認識するきっかけとなり、まちへの愛着や誇りの形成、おもてなしの向上といった、観光まちづくりの機運を高める効果を見込める。

【8 まとめ】

本研究では、インタビューより発見した富岡の「人」という魅力を商店街の歴史や生活文化との関わりから分析し、資料やデータで裏付け・説明することにより、地域資源として富岡の「おせっかい」を発掘した。さらに、「おせっかい」を地域資源として捉え、パンフレットなどのツールを用いて情報発信をすることで、観光客に対するPRだけでなく地域に対するプラスの効果が見込めると考えた（図8）。



図8：まとめ

出典：報告者作成

地域の人々にとっておせっかいは生活の中に当たり前に浸透しているものであり、それが地域資源になるという認識はないと思われる。しかし、報告者たちのようなよそ者の視点から見ると、おせっかいは非日常の体験であり、魅力的な地域資源となる。このようなよそ者からの評価は、おせっかいという地域の日常が魅力であることを示し、「日常＝魅力」という気づきを地域の人々に促す。また、そうした「日常＝魅力」としての認識は、地域の人々が地域を捉え直すきっかけとなり、「まちへの愛着・誇りの形成」を促すことにもなる。そうしたまちへの愛着や誇りを持ち、まちのために行動をする人が増えることで、まち全体の「おもてなしの向上」ひいては「観光の促進」につながると考えられる。したがって、観光と地域との間に好循環が生まれ（図9）、本研究の目的としていた富岡市の観光まちづくりに役立てることが期待できる。

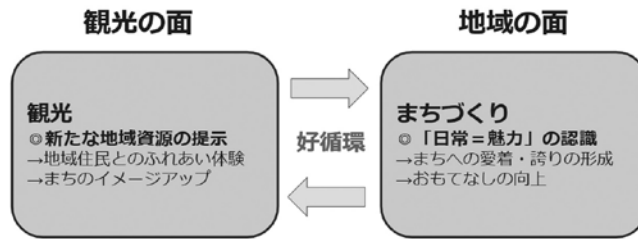


図9：観光まちづくりによる好循環

出典：報告者作成

【参考文献】

- 足立裕 (2015) 『「富岡日記」 富岡製糸場を歩く心の旅』 ワイズファクトリー
- 井上政一 (1977) 「地方小都市における商店街の形成と変貌——群馬県富岡市富岡町の場合 (都市の歴史地理)」 『歴史地理学紀要』 (19) 215-238
- 岡野雅枝 (2018) 「昭和20年代後半から30年代初頭の片倉製糸工場の女性労働環境について——組合機関誌にみる女性労働者の要望」 『平成29年度富岡製糸場センター報告書』 富岡市、57-72
- 片倉工業株式会社人事部長助友康郎編 (1988) 『かたくら縮刷版』 片倉工業株式会社
- 観光まちづくり研究会 (2000) 『観光まちづくりガイドブッカー地域づくりの新しい考え方～「観光まちづくり」実践のために』 (財) アジア太平洋観光交流センター
- 高橋伸二 (2018) 『櫻の如く』 上毛新聞社
- 富岡市 (2012) 『富岡のまち～まちのおこり400年～』 富岡市教育委員会
- 富岡市 (2020) 『富岡製糸場継承される革新の歴史』 Echelle-1
- 富岡市 (2020) 「見学者数/しるくるとみおか 富岡市観光ホームページ」 <www.tomioka-silk.jp/tomioka-silk-mill/guide/record.html> (2021年1月29日アクセス)
- 富岡市商工会議所 (2017) 「とみおかしおもてなし五カ条作成」 <<https://www.tomiokacci.or.jp/news/1318>> (2021年1月29日アクセス)
- 富岡製糸場誌編さん委員会 (1977) 「工女の思い出 (ききがき)」 『富岡製糸場誌 (上)』 富岡市教育委員会、1131 - 1258
- 富岡地域商業近代化委員会 (1986) 『富岡地域商業近代化地域計画報告書』 富岡地域商業近代化委員会
- 中山まりか (2013) 「富岡市中心市街地における歴史的・文化的価値に関する研究」
- 日本大学商学部木下征彦研究室編 (2018) 『<世界遺産のまち・富岡>へのまなざしに関する調査 集計報告書』 日本大学商学部木下征彦研究室
- 森谷健 (2006) 「旧官営富岡製糸場の世界遺産登録とまちづくりに関する富岡市民意識調査 (報告)」 『養蚕・製糸・織物などの歴史遺産を生かした「シルクカントリー群馬」の地域再生構想調査報告書』 国土交通省住宅局、25 - 37
- 遊子谷玲 (2014) 『世界遺産富岡製糸場』 勁草書房
- 横田真一 「商店街の機能について」 『奈良県立大学研究季報』 奈良県立大学、147-154
- 和田英 (2014) 『富岡日記』 筑摩書房

※謝辞

本研究を進めるにあたり、私どもの取材に快くご協力してくださった富岡市役所、地元企業、商店街の住民の皆様、また絹ラボの主催・運営をしてくださったシルクカントリー群馬プロジェクト実行委員会に厚く御礼と感謝を申し上げます。